さがみ縦貫道路建設事業　寒川町倉見地区
遺跡見学会
公益財団法人　かながわ考古学財団

宮山中里遺跡・倉見川端遺跡・倉見川登遺跡

概要

寒川町倉見地区の発掘調査は、一般国道４６８号(さがみ縦貫道路)建設事業に伴う埋蔵文化財の記録保存として、平成１６年度から実施されています。ここ倉見地区には、宮山中里遺跡、倉見川端遺跡、倉見川登遺跡の３遺跡が神奈川県埋蔵文化財包蔵地台帳に登録され、弥生時代から近世の遺跡として周知されています。これらの遺跡は相模川左岸の自然堤防上に立地し、標高は海抜約１０ｍ前後を測ります。発掘調査地点は工事の関係上、橋脚(ピア)等の建設予定地であり、ＪＲ相模線宮山駅から倉見駅の間に点在しています(裏面参照)。

宮山中里遺跡は、さがみ縦貫道路建設事業に伴って平成１２年から平成１４年にかけても発掘調査が行われており、自然堤防上に弥生時代の集落や古墳時代後期の群集墳が展開していることが明らかになっています。

近世

調査地区の表土を掘削すると宝永４(１７０７)年の富士山大噴火の火山灰が部分的に堆積しているのが確認できます。

また、ＪＲ相模線の西側には江戸時代中期以降に造られたと思われる旧堤防が延びており、その中や調査区の浅いところからは、染付けの磁器など当時の生活雑器が出土しています。

中世

Ｐ９４地区(裏面写真④)では今の地表から約1.4ｍ下で、区画溝と思われる大規模な溝が検出され、大量の礫とともに鎌倉時代の陶器片が出土しました。

また、Ｐ９８地区では井戸や土坑が発見され、井戸からは常滑産の甕片が出土しました。そのほか、遺構ではありませんが包含層からは中国龍泉窯の青磁片が出土しました。

古代

古代以前の住居では家の真ん中に炉を造り煮炊きなどをしていましたが、古代に入ると技術革新があり、カマドが出現しました。

ＡＥ２地区で発見された４号住居跡(裏面写真②)では２基のカマドが検出されましたが、これは造り替えられたものです。

古墳時代

Ｐ９２地区１号住居跡からは青銅鏡が出土しました。表面を観察する限り乳文鏡と考えられます。もし乳文鏡だとすれば県内では３例目の出土となります。直径は6.7ｃｍを測り、発掘時は鏡面を上にして出土しました。保存状態もよく、鈍く輝いています。詳細については今後の分析を待たなくてはなりませんが、古墳時代を考える上で重要な発見と言えます。

遺構では、古墳の周溝（裏面写真①・③）も今回多く見つかっています。過去の調査も含めると、古墳が検出された範囲は長さ１ｋｍに及びます。群集墳の展開について新たな資料の蓄積につながりました。

弥生時代

Ｐ９２地区やＰ９８地区では、弥生時代後期の住居跡が発見されました。

Ｐ９２地区２号住居跡は火災にあったようで、床面からは(裏面写真⑥)柱が焼けたものと思われる炭化材や、おびただしい焼土が検出されました。また、壁際からは複数個体が重なるように、台付甕等がつぶれた状態で出土しました。